



画家 小野寺 純一

一年の終りに、恒例の大掃除をして、清らかな心で新しい年を迎える、というのが一般的であります。私の場合、物置だけは先送りされてきた開かずの間みたいになっていましたが、父の遺品整理のために思いきって開けた奥に、その鞆がありました。昔、国鉄の観光キャンペーンで、ディスカバー・ジャパンというのがありまして、取材先の気仙沼で通りがかりのおじさんから確か五百円で譲ってもらったものでした。今は亡き父親が、私の子供のころの遊び道具や雑誌、小学5年の時の通信簿などを、大事にその鞆の中にとっておいてくれたのです。めくるたびに、手にとればあの日の情景が甦ってきて、運動会の徒競走では、一粒300メートルのグリコを食べてスタートラインに立つも、やっぱりビリで、あれ以来、全く運動にはむかないと知り、もっぱら絵ばかり描く少年になったのです。鞆の隅に、小さくなるまで削られた鉛筆がころがっています。「あっ」とすぐ思い出しました。この軸が緑色のちびた鉛筆は、ぼくよりふたつ上で、坊主頭の目がキリッとした近所の勇ちゃんが、鉛筆は、ここまで削れるんだと自慢しているのを「いいなあ・ほしいなあ」と思っていてくれませんでした。勇ちゃんは戦争でお父さんを亡くし、お母さんは失業対策の道路清掃で妹の三人で暮らしていて、くらしは楽ではなかったようです。それは勇ちゃんは年中、ダブダブのゴム靴をはいていたからわかりました。でも靴底のアミがなく冬場には、足が霜焼けになって赤くただれてかわいそうに思い、家にあった古いタオルをあげたところ、これはあったかいねとよろこんでくれました。5年生の冬が終って桜の咲くころ、学校での工作の時間にゴムの力で飛ぶ模型ヒコーキをつくることになり、大空を飛んでいく自分の飛行機を夢みて作りすすめますが、なかなかうまくいかない。それは道具であるナイフの使い方が下手だったからです。その点勇ちゃんは自分のナイフをもっていて自在に使いこなすのでした。名前を肥後ノ守という、折畳みナイフで、いつもポケットにいれ、必要になると、サッと取り出して器用に拵えごとをするのをみて、あざやかなテクニックに、尊敬の念は強まるばかり、ある時勇ちゃんはそのナイフをながめながら「これまで何べんも指を切って、痛い思いをした。映画みたいにナイフをふりまわすやつは、人が切られる痛みがわからないんだ。だからこれを人にむけるような卑怯なやつになるなよ」。そんな大人みたいなことをいう勇ちゃんに、カッコ良さとかあがれは強くなるばかりで、いつか自分用のナイフをもちたいと思っておりました。あの楽しい夏休みも地獄の宿題とともに終り、登校日の朝、家の郵便受けの中に、厚紙でつくった小箱がありました。開けてみると肥後ノ守と、ちびた鉛筆、白いメモ紙があり

ました。「ぼくは急に遠くの町に引越すことになりました。きみのほしがっていたナイフとえんぴつ、おいていきます。さようなら。勇太」とありました。

突然あっけなく消えてしまった勇ちゃん。あの時のナイフはなくしてしまったけれど、こうしてちびた鉛筆をながめていると、勇ちゃんがいていたように生きてきたのかな、そんな思いにふける大掃除、今年もまた時間切れで終るのです。



(絵：小野寺純一さん)